みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「中国帰国者」の表象をめぐって：トランスポジションの展示を目指して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 誠 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001548

庄司博史・金美善編『多民族日本のみせかた――特別展「多みんぞくニホン」をめぐって』
国立民族学博物館調査報告　64:199-210(2006)

「中国帰国者」の表象をめぐって
トランスポジションの展示を目指して

南　誠

1　はじめに――「中国帰国者」との出会い――

1.1　まなざされる「私」

「中国帰国者」(以下は「」を略す)とは，日中国交が回復した1972年以降，日本へ永住（帰国)・定住するようになった「中国残留日本人」(以下は「」を略す）やそれに伴われ来日した家族，および58年までの集団引揚で一緒に日本へわたれずに，中国に残されたその家族のことを指している。

今回の「多みんぞくニホン」特別展の中国系コーナーの一角に，中国帰国者のコーナーが設けられた。中国帰国者を日本社会のマイノリティ・グループの中国系としてみなし，かつ展示するのは，私の知る限り，今回が始めてである。私は当事者として，そして研究者という二つの立場から展示の企画，実施に関わってきた。展示に参画してきたプロセス（構想，実現，成果）を述べるには，まず，当事者としての私が中国帰国者との出会いから語っていく必要がある。

私は中国残留婦人の祖母を持つ中国帰国者三世である。1989年，日本に定住するようになり，現在は永住資格を保有している。しかし，私が自らを中国帰国者だと意識するようになったのは，大学院に入学してからである。

2001年，中国帰国者について，調査する機会を得て，長野県飯田市に１ヶ月ほど滞在した。調査のプロジェクトには日本人の学者／大学院生，中国からの留学生が参加し，グループで中国帰国者らの話を聞いてまわった。そこで，私ははじめて，これまで私自身があまり意識しなかった中国帰国者としてまなざされる「私」と出会ったのである。しかし，その「私」とは決してそれまで私自身が思っている「私」ではなかった。ミードの言葉を借りて言えば，「主我」(I）と「客我」(ME）がその「場」で出会ったのであった。

そこで出会った「客我」とは日本社会によって作られた中国残留日本人／中国帰国者像であった。それはメディアなどによって，記憶・表象され続けてきたものである。つまり，文化産業において操作・制御されてきた中国帰国者アイデンティティ・カテゴリーであり，メディア実践によって形成されたイメージである。しかし，そのアイデンティティ・カテゴリーやイメージは私自身が生きてきた「生活世界」とかけ離れているような気がした。その間には，ポリティクス的なものが常に潜んでいることにも気付いた。

現実と乖離したメディアによる中国帰国者の表象は，展示を企画するに当って，もっとも私を悩ませていた。それをどう表象していけばいいのか，展示の全過程において，私は葛藤していた。本稿ではこれらを含めて，展示の構想，実現およびその後について述べたい。まず，次節ではメディアによる表象について鳥瞰してから，展示について述べていきたい。

1.2 「中国帰国者」の表象 ―― 喪失の物語 ――

これまで，中国帰国者という人びとの現実の生活にかんしては，「中国残留孤児」としてマスメディアで取りざたされてきたのに反して，彼（女）らが歩んだ複雑な経緯はさほど明らかにされていない。その結果，中国帰国者の個々の「豊かな」体験は，中国残留日本人をめぐる「戦争被害者」「棄民」という二つの言説によって構築された犠牲者的な「大きな物語」のかげに捨象されてしまっている。なぜ，このような言説が形成されてきたのかにかんして，まず，それに至るプロセスから，簡単に触れておきたい。

中国帰国者一世である「中国残留日本人」の多くは満州移民として，戦前あるいは戦時中に中国東北地域へ渡った人たちである。1945年，日本の敗戦によって，国家（軍隊）による保護や生活のすべを失い，生きるために，多くの人が現地の家庭に入ったのである。その後の集団引揚によって，多くの日本人が引き揚げたにもかかわらず，「中国残留日本人」となった人びとはその引揚援護対象から外されたことによって，「残留」を強いられたのである（南 2005a）。また，その後の日本社会の忘却政体[1] によって，忘れ去られたのである。これらの要素によって，「中国残留日本人」の「忘却の穴」（アーレント 1981）が形成されはじめた。

1972年，日中国交の回復によって，状況が改善された。民間ボランティア団体の活動によって，「中国残留日本人」の肉親捜し・帰国促進運動が行われてきた（南 2006b）。それが実って，1981年 3 月，「中国残留孤児」の訪日調査が開始された。「中国残留日本人」ないし「中国帰国者」のイメージは，この肉親探し・帰国促進運動の中で形成されてきた。

肉親探し・帰国促進運動において，中国残留日本人は日本人であること（ルーツ捜し），「祖国日本」へ帰国したい気持ち（家族との団欒），戦争被害者としての境遇などがレトリックとして使われ，それがメディアを通して社会的に普及した。これらのレトリックは，「中国帰国者」の「犠牲」の物語，「喪失」の物語を定着させ，「感傷の共同体」を創造したのである。これらのすべてが「忘却の穴」に吸い込まれた中国残留日本人を政治的主体にするためのレトリックであった。

民間ボランティア団体の運動によって，日本政府が動かされ，「中国残留日本人孤児」と「中国残留婦人」に対する支援策を施行してきた。そのレトリックは一定の成果を収めてきたといえよう。しかし，その反面，中国帰国者が中国で生活してきた事実はほと

んど直視されていない。中国帰国者に関するこれまでの学術的研究にも，このような傾向が見られる。それらを大まかにまとめると，次のようになる。

> 「中国残留日本人」は「戦争被害者」であり，日本政府による「棄民」である。それが原因で，彼（女）らは祖国を失い，中国での残留を強いられ，悲惨な生活をしてきた。いわゆる「喪失の物語」である。

このように語られてきた中国帰国者は犠牲者的であり，救われるべき存在というイメージが形成されてきた。上述したように，民間ボランティア団体の運動のレトリックとしてはこれらは有効であったが，しかし，果たして現実がそうだったのかは疑問である。

中国帰国者にとって，日本への帰国だけがすべてだったのか。そして，中国での生活が悲惨だと捉えられるのは，経済大国となった日本の生活水準を基準にしているからではないのだろうか。つまり，日中両国間の経済ギャップが中国帰国者のイメージ形成に影響を与えているのだ。しかし，彼らは経済的に不利な立場であっても，それなりの生活戦略（桜井 1996）があったのではないのか。そこから精いっぱい生きる姿がうかがえるはずである。これこそ，中国帰国者を語る上で，もうひとつ語りの「豊かさ」があったのではないのか。にもかかわらず，これまでの中国帰国者をめぐる「救済のパラダイム」の状況下では，上述した民間ボランティア団体の運動のレトリックだけが強調され，中国帰国者の個々の「豊かな」体験はそのかげに捨象されてしまっている。

以上のような状況を顧み，今回の中国帰国者の展示では，これまでの通説に惑わされずに，中国帰国者の生活世界を出来るだけ忠実に再現しようとした。また，このような展示を通して，中国帰国者と日本社会との多文化共生環境が構築されていくことを期待したのである。

2 「中国帰国者」の展示

2.1 中国系としての「中国帰国者」

「多みんぞくニホン」という特別展の主旨にあわせて，中国帰国者のコーナーも来日の背景，定着の経過，生活実態および日本社会とのかかわりを中心に構想した。また，中国残留日本人を日本人というカテゴリーで捉えがちのこれまでの通説と異なって，中国帰国者を在日マイノリティ・グループの中国系として展示した。これは初めての試みである。このように中国帰国者を扱った理由は，以下のようになる。

まず，中国帰国者は中国残留日本人だけではなく，その配偶者や子孫をも含んでいること。中国残留日本人は「日本人の血を引く」が，その配偶者と子孫は必ずしも「日本人の血を引く」わけではない。もちろん，中国残留日本人同士の結婚のケースもあるが，

数的にはそれほど多くない。このようにしてみると，血縁関係という面から言えば，中国帰国者は中国的であるといわざるを得ない。これは少数の中国残留日本人（10代後半あるいはそれ以上の年齢で中国へ渡った人たち）を除き，ほとんどの中国残留日本人にも言えることである。なぜならば，中国残留日本人は「日本人の血を引く」が，しかし，幼少のときあるいは長い間，中国で生活してきたため，その生活様式，思考様式などは日本的であるよりも，中国的であるからだ。ゆえに，中国帰国者を日本人というカテゴリーだけで語ることはできない。

また，1980年以降の民間ボランティア団体の運動のレトリックのなかに，中国帰国者の中国的な要素が強く打ち出されていたため，中国帰国者は「中国的」であるという見方が定着している（南 2006b）。この現象は中国帰国者の日常生活の中でも見られる。中国語を話す，中国的な食事風景，中国的な舞踊・歌を楽しむ，などの中国帰国者の姿は，周りの人から「中国的」であるとしか見られていない現実がある。このような現象は筆者のフィールドワークの中でもよく見られる。中国の舞踊を楽しむ中国残留日本人孤児たちを見て，中国人だと思って声をかけたら，“自分たちは日本人だ”と返答され，それに戸惑う地域の方も多かったという。

以上のような理由から，「多みんぞくニホン」特別展において，中国帰国者を老・新華僑と異なる第三の中国系グループとして扱った。

しかし，中国帰国者の歴史は老華僑と比較して短い。一旗を挙げようとして，来日した新華僑の「成功の物語」とも異なり，中国帰国者の場合は既述したような「喪失の物語」が社会的に再生産されてきた。両者との違いから，中国帰国者の展示をその特殊な歴史的経緯（日本から中国，中国から日本），多重文化様式（生活習慣，思考様式など），そして民間ボランティア団体の運動などに重点をおこうと考えた。このような展示を通して，これまでのように日本社会への不適応・隔絶，戦争の犠牲者，喪失の物語といった受動的なイメージではなく，より中国帰国者の生活世界に入り込んだ主体的で能動的な生き方を浮上させることを目指そうとした。また，日本あるいは中国だけではなく，日中両国にまたがって（あるいは日中両国に限らず），中国帰国者の生活世界が広がっていることを今回の展示であらわそうとした。

2.2「中国帰国者」展示の詳細

上述したような狙いにそって，筆者のこれまでの研究調査活動あるいは普段の生活のなかで接してきた中国帰国者から写真，資料や実物を拝借し，今回の展示に用いた。以下は，展示の詳細を歴史的経緯，写真パネル，食卓コーナー，教育コーナー，民間ボランティア団体コーナー，その他に分けて，説明していく。

2.2.1 歴史的経緯

中国帰国者の特殊な歴史を表わす手段として，年表パネルを用いた。年表パネルは単に年代史的な表記ではなく，よりわかりやすくするため，個人のライフストーリーを織り込んだ。ライフストーリーとは個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリーである（桜井 2003）。私が用いる研究手法の一つでもある。今回の展示に使用した中国残留婦人と中国残留日本人孤児のライフストーリーは，これまで聴き取ったものを本人の了承を得たうえで使用した。

年表は三段に分けて編集した。上段には，中国帰国者をめぐって重要と思われる歴史的な出来事―満州事変，日中戦争，日本の敗戦，集団引揚の終結，「未帰還者の特別措置法」の施行，中国で起こった文化大革命，日中国交の回復，中国残留日本人孤児の訪日調査の開始などの帰国者をめぐる日本政府の政策や現在進行中の中国残留日本人の国家賠償裁判―を年代史的に並べて，呈示した。中・下段には中国残留婦人や中国残留日本人孤児のライフストーリーを表記した。ライフストーリーに関しては，それぞれのライフイベント―生まれ，渡満，残留に至る経緯，結婚，仕事，日本への一時帰国，永住帰国など―を中心に構成した。

このように，歴史的な出来事と個人史とをクロスさせ，中国帰国者に関する主な出来事だけではなく，個人史を織り込むことによって，両者の関係をわかりやすく展示した。これはライフヒストリーの手法であるともいえる。しかし，それに関する解釈は編集者の私ではなく，観客に委ねて，個々の豊かな想像力を引き出そうとした。その限界を意識しつつも，できるだけそのように編集して呈示した。

このほか，各時期の出来事に合わせて，実物の資料―満州国時代の卒業証明書（中国残留婦人の主人所持），未帰還者特別措置法による死亡宣告書類一式（中国残留日本人孤児），中国での「外国人居住証」（日本でいう外国人登録証），中国残留日本人孤児が持つ日中両国のパスポート，中国残留日本人孤児の国籍裁判―などを展示した。

2.2.2 写真パネル

写真パネルでは中国帰国者の日常生活を紹介した。日本だけではなく，中国で生活していた時の写真（中国残留婦人のある大家族の中国で取った写真，そして，日本に来てからの写真）を使った。そうすることによって，二つの国を生きる彼（女）らの姿を浮かび上がらせようとした。また，ここで使った，中国で幼稚園に通う子ども（中国帰国者三世）と日本での幼稚園出迎えの写真の子どもは同じ人物である。このように展示することによって，二つの祖国を生きる彼（女）らの姿だけではなく，教育コーナーで表そうとした中国帰国者の教育事情（日本だけではなく中国的な教育も受けさせるということ）を関連させてみた。

このほか，写真パネルでは，日本での生活様式，すなわち仕事風景（工場，レストラ

ン，自営業のディスクワーク），大学で中国語を教える二世，中国帰国者二・三世が活動するときの写真，現在進行中の中国残留日本人国家賠償訴訟関係などの写真も展示した。

2.2.3 教育コーナー

中国帰国者の教育事情は他の中国系と異なり，子どもだけではなく，高齢者である一世に対する日本語教育も重要である。しかし，一世に対して行う日本語教育は，決して充分とは言いがたい。このような中国帰国者をめぐる教育事情の特殊性にそって，一世の授業風景，二・三世の授業風景などの写真を展示に用いた。また，課外活動（手作りカレンダー，龍舞い，獅子舞，餃子作り，折り紙教室，遠足など）について写真で紹介した。

子どもの教育に対して，日本での進学，日本社会への適応という視点だけではなく，母国の言語及び文化についても勉強して欲しいというのは，中国帰国者も他のマイノリティ・グループとは変わらない。それを表すのに，中国帰国者が子どもに対する教育で使う絵本（日本の『子どもチャレンジ』など），ビデオ，カセットテープを展示した。このほか，10代後半で来日した二世などが中国から持ってきた教科書，日中両方の大学の卒業書，日本小・中学校の卒業書などの資料も展示に用いた。

2.2.4 食卓コーナー

食卓はマイノリティ・グループの特徴をもっともよく現しているといえよう。中国帰国者の場合は世代間の違いをも出すため，一世と二・三世の食卓風景を別々の写真で紹介した。

両親が日本人で，したがって「日本人の血だけを引く」中国残留婦人の場合は，餃子がもてなしの料理として出されている。しかし，その一方，日本の浅漬けなどの料理も食卓を飾っている。それに対して，二・三世の場合はあまり国境にこだわらない。中華料理（中国東北地域の料理が中心），和食，洋食などと，その食卓風景は一世よりも多種多様である。

このほか，中国帰国者がよく使う食材である塩（家鴨）蛋（塩漬け玉子），とうもろこしの粉，中国東北地域の独特の味噌なども展示した。筆者はフィールドワークの際，調査対象者からよくこれらのものをご馳走になったり，お土産としていただいたりすることも多い。中国帰国者の多くは，これらの食材を語るときは懐かしそうな顔をする。それだけに，これらの食材は日本社会を生きる中国帰国者にとって，彼（女）らと中国とをつなげる重要な存在だといえる。また，中国帰国者集住地にある中国雑貨店でも，これらの食材は実際によく買われるという。

2.2.5 民間ボランティア団体コーナー

他の中国系と異なって，中国帰国者には自ら創設した団体が皆無に等しい。これまで，中国帰国者をめぐって設立した民間団体のほとんどは，民間の日本人ボランティアによる支援団体であった。このような民間ボランティア団体には，中国帰国者と日本社会を媒介する役割がある（南 2006b）。今回の展示において，民間団体の活動を紹介することで，中国帰国者がどのような立場に立たされているのかが，見る人にわかってもらえると考えた。また，これまで，中国帰国者との接点が全くない人でも民間団体を知ることによって，中国帰国者と接していくことが可能となる。このような考えで，今回の展示で民間ボランティア団体のコーナーを設けた。パネルと実物展示という形式を取った。

この民間ボランティア団体のコーナーでは，関東地域と関西地域を中心に一覧表のパネルを作成し，呈示した。また，主な団体の活動については説明文をつけた。このほか，各団体が発行する機関紙，ニュースレーダーなどの刊行物をも実物展示した。

2.2.6 その他

中国帰国者の中国での生活は，今回の展示の主旨から言えば，直接の関係はない。しかし，既述したような中国帰国者をめぐる「喪失の物語」が氾濫しているなか，あえて，中国帰国者のコーナーでは中国で生活していたときのアイテムをいくつか展示した。たとえば，中国の大学の卒業証明書，弁護士免許などである。これらを展示することで，これまでの中国帰国者の中国での生活が悲惨だったというイメージに対し，彼（女）らが頑張って生活している様子，底辺だけではなく成功している人も中にいることを現わそうとした。また，中国帰国者が中国で収集した「毛沢東グッズ」，愛読書なども展示した。

中国帰国者の日本での生活実態に関しては，写真パネルなどにおいても呈示した。他にも，日常生活を紹介しようとして，常備薬としての風邪薬やのど飴などを展示した。これらの薬は日本のだけではなく，中国のも常備されているのが特徴である。これを通して，中国帰国者と中国との関係は，決して切りはなせるものではないことを表そうとした。

中国帰国者の職業に関しては，単純労働のイメージが強い。展示の中では，単純労働だけではなく，職業が多岐にわたっていることを表すため，大学教員，自営業者，中華料理店を開業した人などの事例を紹介した。

このほか，中国帰国者に関して，今もっとも話題になっているのは中国残留日本人国家賠償訴訟である。この訴訟は中国残留日本人が自らの権利を主張する運動であると同時に，「自己承認」をめぐる社会運動でもあるといえる。また，この運動をめぐって，中国帰国者が自ら組織し，活動するというのはこれまでにあまり見られないことであ

り，この運動の特徴でもある。展示の中では，写真，訴状，裁判ニュースなどを用いてそれを紹介した。

このほか，日本社会を生きる中国帰国者の娯楽として，中国帰国者が描いた絵葉書なども展示した。

3「中国帰国者」展示を通して

3.1 展示を終えて

既に述べたように，中国帰国者の展示目標はこれまでの通説に惑わされずに，その生活世界を出来るだけ忠実に表すことであった。それを通して，中国帰国者が歴史的な出来事に翻弄されながらも，主体的で能動的に生きていく「生活世界」を浮上させようとした。また，彼らの生活世界は日本あるいは中国だけではなく，日中両国にまたがって（あるいは日中両国に限らず），広がっていることを表そうとした。

この目標および目的に沿って，各コーナーで使うアイテムを選んだ。すべてのアイテムはこれまでの研究調査のなかで得たものや，今回の展示のためにだけ借りてきた。アイテム収集過程のなかでも，様々な出来事に出会った。その出来事によってまた，中国帰国者というコミュニティーに対する認識が深まったのである。これに関しては，また後述する。

中国帰国者の各コーナーではそれぞれのテーマに沿ってアイテムを選んだ。また，異なるコーナーであっても，表わそうとする主旨に沿って，異なるコーナーのアイテムを関連付けてもみた。このように異なるコーナーのアイテムをクロスさせることで，主旨を一層強く表そうとした。詳細に関しては，既に触れたとおりである。

中国帰国者の展示に関して，一つ大きな反省点がある。それは紙資料が多かったこと。そのために，中国帰国者が暮らしの中で用いる実物の展示が少なかった。なぜ，こうなったのかは二つの理由がある。ひとつは収集の時間が少なかったこと，二つ目は中国帰国者の生活様式が他の中国系とそれほど変わらないことである。そのために，中国帰国者の展示では，実物の展示を少なくし，中国帰国者の特徴を表わす紙資料を用いたのである。中国帰国者の年表パネルも中国帰国者の特殊性を表すために用いた。見やすいという評価を得た。

また，これまで，中国帰国者の民族性に関しては，中国の漢民族というイメージが強い。しかし，フィールドワークの中で，中国帰国者は漢民族に限らず，朝鮮族，回族（イスラム系），モンゴル族などの少数民族も多くいることがわかった。今回の展示では，他の中国系コーナーにおいて，そのような多・少数民族性が表わされていた。中国帰国者のコーナーでは，スペースとの関係で割愛した。

3.2 資料収集を通して

資料収集の過程で様々な出来事があった。その中から中国帰国者のコミュニティーについて，改めて考えさせられたことがある。

3.2.1 “私は誰なのか”

中国帰国者をめぐっては，“私は誰なのか”，“私はどこの国の人なのか”という問題が常に付き纏う。しかし，彼（女）ら自身だけではそれを決めることができない。それは常に「主我」と「客我」が相互作用する過程である。これを意識しつつ，以下は資料収集の過程での出来事を紹介したい。

まず，一つ目は，ある中国残留婦人の話を聞こうとしたときのことである。

当事者の語りをビデオに収め，展示に使おうとして，ある中国残留婦人にそれを依頼した。最初は快く承諾してくれた。しかし，当日，「多みんぞくニホン」という特別展の名前，さらに「中国系」として展示されるのを聞いて，依頼したビデオ撮影の件を拒否した。その理由は“私は外国人ではない”からである。

彼女は自分が「日本人の血を引く」，「日本人」であることを強調したかった。その後，“「日本人の血を引」いていても，家族を含めてそれがいえない。また，彼女自身も含めて，中国帰国者の文化背景は中国的である”という私の説明を聞いても，彼女はビデオ撮影を承諾してくれなかった。

二つ目は，資料を借りようとして，ある中国残留日本人孤児の家に行ったときのできごとである。

中国残留日本人孤児の自宅で，彼女自身に関する資料の一式が出されて，見せてもらった。そのなかに，幼少のとき，中国国籍へ帰化したときの書類もあった。しかし，他の書類を積極的に見せてくれたのに対し，その書類だけは簡単に説明しただけで，引出のなかにもどされてしまった。

自分が幼かったとはいえ，彼女は自ら進んで中国国籍に入ったことにあまり触れて欲しくはなかったようである。彼女が中国国籍に入らざるを得なかったのも，当時の状況―日本へ帰国できない，実親と連絡が取れない，中国で生きていくしかない，そのために中国国籍に入ったほうが便利である―を考えれば，仕方のなかったことである。

しかし，既述したような70年代以降の民間団体による中国残留日本人肉親捜し・帰国促進運動のなかで，「日本人」だというレトリックが頻繁に強調されてきた。現在行われている中国残留日本人の国家賠償訴訟においても，同じ傾向が見られる。これは，70年代まで中国残留日本人を排除してきた日本社会が，行政的にも，思想的にも彼（女）らを「日本国民」として再包摂しようとしてきた社会現象である。このような風潮の中で，中国残留日本人の中国的な部分が抑圧されがちであった。

“私は誰なのか”，“私はどこの国の人なのか”といった中国残留日本人や中国帰国者

をめぐって生じる彼（女）らの言動―日本人であることを強調したり，中国的なものを隠そうとしたり―は，これまでのジャーナリスティック的なものから学術的な研究で問題視されてきたが，実際には彼（女）ら自身の内面的な問題ではなく，むしろ，「日本人」が一方的につくりあげた，中国帰国者の社会的なアイデンティティ・カテゴリーに対する「戯れ」であるといえよう。これに関しては，中国帰国者二・三世にも言える事柄である。以上のような現象から，日本社会の中国帰国者に対する同化圧力は，他の中国系やマイノリティ・グループよりも強いことがうかがえる。

中国帰国者は日本人でもなければ，中国人だともいえない，逆説的に言えば，日本人でありながら，中国人でもある。これまでの中国帰国者をめぐって展開してきた表象から，このような中国帰国者の存在を垣間見ることが大事である。それを通して，このような異質性，特殊性をもつ中国帰国者と日本に暮らすさまざまな人たちとの共生が可能となる。展示の中で，中国帰国者の生活世界は日本あるいは中国だけではなく，日中両国にまたがって広がっていることを表そうとしたのはこのためでもあった。

3.2.2「中国帰国者」のコミュニティー

これまで，自分たちの自助組織が存在しなかったことや，相互扶助の関係があまり見当たらない，といった理由から，中国帰国者には「コミュニティー」が存在しないと言われがちであった。しかし，果たしてそうだろうか。コミュニティーをどう定義するかによって，その解釈も異なってくるが，以下では私がこれまでの調査や今回の展示を通してわかってきたことについて述べたい。

既に述べたように，2001年，私は長野県で中国帰国者の調査をやってきた。それ以降は東京都周辺の中国帰国者とも接してきた。また，2003年から京都に引っ越してきて，関西地域の中国帰国者とも関係を持つようになった。フィールドワークの中で，中国帰国者には自分たち自身の確固した組織はないが，しかし，相互扶助は常に行われていて，職探し，病院関係，教育問題などをめぐる情報交換が盛んに行われていたことがわかった。そういった情報ネットワークは，時には創造ネットワークとしても機能している。特に，2001年以降の中国残留日本人の国家賠償訴訟運動を通して，このネットワークは一層強まっている。

情報交換ネットワークは同じ地域に住む中国帰国者に限らず，中国で生活していた地域が同じであった場合，あるいは訪日調査が同じ年であった場合，通っていた定着促進センター・自立促進センターが同じ場合も，このような現象が見られる。中国で生活していた地域が同じの場合は，そのつながりがより一層強い。私が中国のある地域に限定して，聴き取り調査を行うときも，このようなネットワークに頼っていた。今回の展示に用いる資料を借りる際も，中国帰国者同士のネットワークを辿っていったのである。以上のように，今回の展示の資料収集を通して，中国帰国者のコミュニティーの実態が

ある程度確認できた。もちろん，これに関しては，今後，更なる詳細な研究調査が必要であることは言うまでもない。

4 おわりに

以上のように，「多みんぞくニホン」という特別展における中国系として中国帰国者の展示を構想し，実現してきた。振り返ってみれば，今回の展示で，筆者が目指したかったのはトランスポジションの展示であったといえよう。

今回の展示で，筆者は常に「発話のポジション」に注意を払っていた。「発話のポジション」の問題とは言説によって制御される発話の可能性の問題である（太田 1998：7)。中国帰国者をめぐっては，まず，「喪失の物語」といった他者によって構築された「発話のポジション」がある。また，それによって制御されてしまう中国帰国者自身の発話もある。他者によって構築された「発話のポジション」が圧倒的に支持を得ている今では，中国帰国者自身の発話はしばしば聞き取ってもらえない。スピヴァックが指摘したサバルタンが語れないのは，まさにこのような状況をさしている（スピヴァック 1998)。このような現状に鑑みて，今回の展示では中国帰国者自身の発話を掬いつつ，複数の「発話のポジション」をリンクさせて（太田 1998）表象することを目指してきた。このような展示を通して，中国帰国者のこれまでの表象が「構築されたもの」であることを見抜き，もう一つの別の可能性への想像を促していこうとした。

しかし，これまでの研究では，中国帰国者をめぐる「発話のポジション」の実態がまだ解明されたとは言いがたい。また，解明するのに必要な資料も充分に整理されていない。それについての研究もまだ始まったばかりである。こういった理由から，今回の展示において，これらの複数のポジションをリンクさせることは不充分であったといわざるを得ない。これに関しては，今後の課題にしていきたいと考えている。

今回の展示で目指してきたようなトランスポジションの展示は，筆者がこれまで考えていた「脱構築」の作業の一環であるといえる。今回の「多みんぞくニホン」という特別展で中国帰国者を取り扱い，また，それに参画することで，筆者はその「実践」の機会を得た。また，展示を通して今後の研究ないし「実践」の面において，多くのヒントを得ることもできた。

今後は，今回の展示を通して得たヒントをさらに深めていき，新たな場として中国帰国者のホームページを作成し，インターネットというバーチャルの場において，中国帰国者についての「トランスポジション」の表象をさらに試みていきたい。

注

1）「もはや戦後ではない」というフレーズの流行に伴って生じた忘却のポリティクス（高橋 1999）や，「中国残留日本人」の存在が「未帰還者特別措置法」の施行や地域における「喪の作業」の開始によって忘却されていく忘却の政治体制を指す（詳しくは南2005aを参照されたい）。

文　献

蘭　信三

1994 『「満州移民」の歴史社会学』大津：行路社。

2000 『「中国帰国者」の生活世界』大津：行路社。

アーレント，ハナ

1981 『全体主義の起原』（大久保和郎・大島かおり訳）東京：みすず書房。

太田好信

1998 『トランスポジションの思想―文化人類学の再想像』京都：世界思想社。

呉　万虹

2004 『中国残留日本人の研究』東京：日本図書センター。

桜井　厚

1996 「戦略としての生活」 栗原彬編『差別の社会学 2　日本社会の差別構造』東京：弘文堂。

2003 『インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方』東京：せりか書房。

スピヴァック，G

1998 『サバルタンは語ることができるか』（上村忠男訳）東京：みすず書房。

高橋哲哉

1999 『戦後責任論』東京：講談社。

時津倫子

2000 「『中国残留婦人』の生活世界」蘭信三編『「中国帰国者」の生活世界』大津：行路社，49–76頁。

南　誠

2003 「「中国帰国者」の歴史的形成に関する一考察」蘭信三編『「中国帰国者」の社会的適応と共生に関する総合的研究』（基盤研究（B）(1)（課題番号：13410048）研究成果中間報告書），85–161頁。

2005a「『中国残留日本人』の歴史的形成に関する一考察」『日中社会学研究』（日中社会学会）第13号，松山：不二印刷，148–174頁。

2005b「残留の歴史に目向けぬ日本」（朝日新聞2005年７月20日、『声』欄）。

2006a「『中国残留日本人』の形成と記憶」『アジア遊学85　中国残留孤児の叫び』東京：勉誠社，24–36頁。

2006b「『中国残留日本人』の肉親捜し・帰国促進の社会運動―「日中友好手をつなぐ会」の活動を中心に』蘭信三編『「中国帰国者」の社会的適応と共生に関する総合的研究』（基盤研究（B）(1)（課題番号:16330098）研究成果報告書），21–38頁。